

# ドレッサージュホースに育てよう!



これまで、コンタクトを確立するための多くの方法と感覚を伝えてきました。それらの中で私が伝えたいことは、「騎手の拳は、馬がハミを受け入れ、馬自身で体勢を保とうとするきっかけを作るだけ」ということです。

最終的に、馬に自ら騎手とのコンタクトを維持させるために最も重要なことは、バランスです。馬が自分でバランスを維持していなければ、コンタクトも安定しません。馬が自らバランスをとるとは、馬が自身の頭と頸の重さを肩の上に乗せている状態であり、騎手の拳などにもたれたりせずに動いている状態のことを言います。

馬自身がバランスをとらないケースは主に2つあります。

## ① 頭頸を高く上げて反抗し、ハミ受けを拒否する

## ② 頭頸を低く下げてバランスを前へ崩す

①については、これまでの連載で詳しく述べてきました。今回特に詳しく考えたいのは、②についてです。オースミイレブンは、これまで①の時も②の時もあり、バランスを整えるのに大変苦労しています。以前のコラムでも駈歩のバランス改善について述べてきました。

では、なぜ②のような状態になるか? その理由はいくつか考えられます。まずは、先天的に馬の頸の付き方が骨格上低いことが挙げられます。もう一つは、後天的な場合です。これは、馬の頭頸を丸めて低くさせられるようになった上級ライダーがもたらしてしまう後遺症です。多くのライダーは、ハミ受けをさせるために馬の頭頸を丸めます。ここで問題になるのが《バランス》です。馬はライダーに前方に頭を落とすことを要求されるため、その指示通りバランスを前に崩します。ライダーは馬の頭頸が低く丸くなったことに満足し、馬がバランスを前方に崩していることに気付かず、馬の頭と頸の重さを拳で支えています。「この馬バランスが悪いんだよな～」と言い、バランスを前へ崩させているのは自分自身であることに気付いていない、なんていうこともあります。

ライダーがハミ受けをさせようと強い拳によって馬の頭頸を下方へ潜らせ、《空ツバミ》の状態でもバランスを前方に崩してしまっている馬も同じです。これは、ライダーの強い拳の作用の苦しさから逃れるためのサインです。ライダーが、拳に掛かってきた馬の頭の重みを、何度拳で強く口を弾いても解決しません。

しかし、これから説明する方法で、ほとんどの馬がバランスを自分で取り戻します。その考え方はとてもシンプルです。

### 後躯を馬体下に踏み込ませ、前躯を上げる

ライダーがこの考えを持ち、それを実行するだけです。ライダーが物事を複雑に難しく考えてしまえば、馬に対してストレートに伝わらなくなります。シンプルにストレートに馬に伝えていくことが馬が理解していくことに繋がります。

この状態にするためのアプローチ法は色々あると思います。ここでは私がオースミイレブにも実践している方法をご紹介します。

#### ① 脚を使い馬の前進氣勢を促す

まず、脚の合図で後躯を踏み込ませます。ただ、闇雲に脚を強く使えば後肢が良く踏み込むわけではありません。必ず馬の反応を見ながら、前進氣勢が不足しているのであれば脚扶助を使用し、脚扶助で何も変わらなければ鞭の使用も必要です。その逆に、馬に十分な前進氣勢があれば、必要以上に脚を使う必要はありません。

#### ② 膝を鞍につけ、太もも・座骨を鞍に密着させ半減却を使用し、拳は極力使用しない

常に馬の動きと同調している騎座を、半減却を使用しながらやや馬の動きを遅らせるようにします。同時にライダーのウエイトをやや後ろに掛けるようにします。それにより、馬は後方に重心を移そうとします。その時にライダーは極力拳の作用を少なくします。「極力」と表現したのは、馬が前へ行きたがる気持ちを、拳を控えることで抑える場合にのみ必要になるからです。バランスを前へ崩す馬は、手綱を引かれるとそのハミへのプレッシャーから逃れるために巻き込んだり、頭を低くして前へバランスを崩すようになっています。そのためライダーはこの時拳を極力使うべきではなく、騎座を安定させることに集中しなければなりません。

### ③ 馬の歩幅を狭めて、鼻面を前へ出す

半減却で馬の前進氣勢のパワーを、前進するのではなく馬体に溜めるようにする目安として、馬の歩幅を縮めます。それと同時に、馬の頭が上がってきます。馬にとっては、前に行くパワーがあるにもかかわらず前に行けず、その状態からさらに前進を促されれば、馬体を縮めるしかなくなります。そのような状態になれば、前進しようとしたパワーの行き場がなくなり、馬は自分の肩の上に頭と頸の重さを乗せて自然と頭頸は上がり、自分でバランスをとろうとします。その馬の反応を最大限尊重するために、ライダーは拳を使わず、馬の鼻面が前方へ出ていくことを遮ってはなりません。

①～③の扶助は、それぞれ順番に行うのではなくほぼ同時に行います。これらを総合的に組み合わせて、馬の反応を感じて扶助の強弱を変化させます。ここでもライダーの反応はシンプルにいきます。馬の反応が足りなければ強く、足りていれば最小にするべきです。最小にされた扶助は、馬にとっては報酬です。そして馬の自主性も養うことにもなります。ライダーが扶助を出して馬がそれに反応すれば、自分が楽になることを覚えます。そうすると、ライダーからの指示があれば、その体勢を自らとろうとしてきます。

馬が頭を上げて、鼻面を前に出すことを恐れではいけません。どうか、馬が本来持つバランスを活かしてください！

とにかく拳を強く使う傾向にあるのが日本人ライダーの特徴です。もちろん、必要な時は驚くほど強く使う場面もあります。しかし、馬が良い反応を示したときも驚くほど最小限の扶助にする勇氣を持ってください。手綱を無意識のうちに引っ張り、それがライダーのバランスの支えになっていることが多いです。手綱はライダーのバランスを保つためのものではありません。

そして、馬は我々が思っている以上に仕事ができます。馬の仕事は、バランスを自分で保ち前へ動き続けることです。我々ライダーの仕事は、馬が思う存分仕事ができる環境を作ることです。ただそれだけです！でも難しい！（笑）全ては馬と調和するために……。

